と、外国直接投資と技術移転、日本の中小企業の経験など、日本や東南アジアとの比較研究から上海経済を考察する報告とそれに関連する討論があった。

印象深いのは、高度成長を続ける中国経済、なかでも発展が目ざましい上海を持ち上げるのではなく、例えば、外資系企業が抱える諸問題への中国側の対応の問題点などについて率直に報告し、問題を本音で討論していたことである。研究者同士であるので政府にも遠慮が要らない。これが、大学人を軸とした研究シンポジウムの大きなメリットであろう。

開催経費の負担

問題は、開催の経費であった。今回のシンポジウムは、基本的には参加者の自弁であった。交通費、滞在費は自己負担。それに参加費として一人五万円の拠金をお願いした。広島大学関係者が、今後も引続き中国との学術交流や共同研究を行うと思われるので、この拠金について少し説明しておきたい。

中国は、ご存じのように改革開放政策を進めている。政府は国有企業に対しても、また大学に対しても独立採算制を奨励しており、各機関は何か事業を行うとすれば、自分で稼がなければならなくなっている。国からの補助が極端に窮屈になったのである。

今回のシンポでは、総経費は当初、数百万円と言われた。大学にはそんなお金はない。そこで、実費でどれくらいかかるかについて何度も問い合わせた。開催の三か月前頃になって、経費内訳が送られて来て、総額百八十万円の見積をもらった。そのうち三十万円を復旦大学側が負担し、残りの百五十万円（後に百二十万円）を日本側で負担して欲しい、と言ってきた。復旦側の負担分は、上海市が弁済したと聞いた。

さて、日本側の負担分については、手配が遅れたこともあり、公的な支援が得られず、一部経済団体等に拠出願ったものの、大幅に不足することが初めから分かっていた。そこで、シンポジウムの諸経費に加えて、浦東新区や工場の見学、勉強会、懇親会などの諸経費を含めて参加者一人につき五万円のご負担を願うことになったわけである。

中国との学術交流や共同研究において、日本側が全額負担するケースを多く耳にする。民間の事業展開においては、日本側の負担が多くなることは容易に想像できるが、非営利目的で、しかも共同事業を行う場合、負担は平等でなくても双方が負担する原則は守るべきだと思う。

今後の交流計画

ともあれ、復旦大学での国際シンポジウムは大成功であったと思う。上海市の蔡来興副秘書長、鄭励志上海市政府副主席、復旦大学の楊学長、程天権副学長などから丁重なもてなしと祝福を受けたことは、このシンポのインパクトが大きかったことの表れである。日本から参加した研究者、企業や団体のトップのほぼ全員から、帰国後も感謝の言葉が続いている。今年は、引続き第二回目の会議を広島で開催しなければならない雰囲気になってきている。

（やました・しょういち）

NEWS DIGEST

第一回広島大学同窓会連合大会を終えて

第三十一代体育会幹事長　大橋優治

原田学長の熱烈な要望と、山根体育会同窓会理事長をはじめ多くの同窓生の夢により強力に推進されてきた第一回広島大学同窓会連合大会が、去る十二月二日、大盛況のうちに幕を閉じた。実にチケットの販売総数は二千二百枚を超え、同窓会大会への出席者は千三百名近くに上るほどの大規模な大会となった。

今大会は、同窓会として統一組織のない本学に組織的な基盤を作るために、また、その統一同窓会に向けての起爆剤となるよう開催されたものであると同時に、十一月に予定されている統合移転完了の記念事業を支援するためにも開催された。

五月半ば頃からこの仕事に携わりはじめ、多くのかたから叱咤激励され、時にはこっぴどく叱られたりしながら、ようやくこの仕事を終えることができた。寝食を惜しみ、今大会を成功させるために力を尽くしてくれた体育会本部役員の皆さん、また飲み込みの悪い自分をいつまでも見捨てないでいてくださった諸先輩がたには、本当に厚く御礼申し上げます。

（おおはし・ゆうじ）

広大・五大学大会で奮闘！

体育会第三十一代広報主務　浅利仁吾

去る十一月十八日から二十日まで、鳥取市で開催された「第四十五回中国五大学学生競技大会・冬季大会」は、あいにくの雨の中、ラグビー・柔道をはじめとする七競技において各クラブとも熱戦をくりひろげた。なかでも、剣道は男女とも団体の部で優勝したほか、個人戦でも、男子優勝・日野剛（教育04）、準優勝・木村彰英（工04）、女子優勝・河野全美（教育05）、準優勝・林司佳子（教育06）と広大勢が占め、圧倒的な強さを見せた。その他の競技でも、ハンドボール・ラグビー・バスケット女子・アーチェリー女子などが優勝を決め、バスケット女子は大会五連覇を果たした。

総合成績では、七月の夏季大会の成績と合わせてダントツで優勝し、第四十回大会以来の六連覇を勝ち取った。

来年は、広島で五大学大会が開催される。広大生の盛大な応援を得て、一段と盛り上がる大会となることを願うとともに、各クラブのさらなる快進撃に期待する。

（あさり・じんご）

新たな感動 ―初めてのフェニックス駅伝―

文学部哲学科一年　黒木京介

多くの歓声の中、各チームの最終走者がゴールへと次々と入ってくる。その人たちの顔には、なぜか何とも言いようのない満足感が見受けられる。いや、その人たちだけでなく、その場にいた人すべてにそれが見受けられた。しかしまだ、私にはそれがなかった。駅伝が終わったわけではないからである。

十二月十一日、大会当日の天気は雨。駅伝に取ってあいにくの天気であった。なんだか、気分が憂鬱になってくる。さまざまな不安が、自分なりに頭によぎる。「成功するだろうか」この自分に対する問いかけは、何度も繰り返された。

しかし、わたしの心配とは裏腹に、駅伝は着々と進み、気づくと閉会式を迎えていた。会場の後ろには、感動となんともいえない満足感で胸がいっぱいの自分がいた。ここでやっと味わえた気持ちである。

この駅伝を通じてわたしが得たもの―それを一言で表せば、人々と協力して大きな事業をやることのすばらしさ、その成功後に得られる喜びであった。

（くろき・きょうすけ）